
Over Line ~ 君と出会うために

さつきひろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Over Line ～君と出会ったために

【Nコード】

N9438Y

【作者名】

さつきひろ

【あらすじ】

ある日の昼休み、彩と同じテーブルに乱入してきた一人の男。

彼は終始マイペースで勝手な振る舞いをし、彩は腹立ちを抑えきれない。なのに、そのペースに巻き込まれていく。

入り口の方から人が入ってくるたびに、ドアに取り付けられた鈴が重苦しい音を立てる。この店と同様に年季の入ったそれは、お世辞にも軽やかな音とは言えない。それでも、人が来たことを知らせる役には立っているのだから、無用の長物というわけでもないのだろう。

鈴くらい、さっさと取り替えたらいのに、と思わなくもないが、慣れてしまうと、これはこれで味がある気がしてくるから不思議だ。きっと、ここに通う常連は、似たようなことを考えているに違いない。誰かが文句を言っているところは見たことがないし、そもそも、鈴を替えたところで、ここの客層や入りが変わるとも思えない。

つまり、何も変わらないから放置されているのだろう。

ここは、まるで時が止まったかのようにレトロな空間だ。

いつ来ても時が止まっているように思える、寡黙なマスターが一人でやっている、街の小さな喫茶店。駅からはさほど遠くはないが、大通りからは一本入った閑静な場所にあり、通りすがりにふらっと立ち寄ることができるような魅力的な立地ではない。

年季の入った扉を開ければ、カウンターと、十席にも満たないテーブル席。昔ながらの、とでも付け加えたくなるような外装とその立地も手伝って、客の数は限られている。それでも、それなりに常連客はいる。

彩あやだって、それが気に入って通っている一人だった。

限られた人数しか入らない店は静かで落ち着くし、マスターの淹れるコーヒーの香りが漂う店内はひどく居心地がいい。考えごとがある時や一人になりたい時にはもってこいだし、コーヒーを飲みながらぼんやりとしているのも至福の時だった。

彩は、この近くにある小さな会社の事務員だ。小さい事務所の性
とでも言うべきか、交代でお昼を取るために一人で昼休みを過ごす

ことも多い彩は、あまり混み合わないこの店が気に入っていた。昼時でもさほど混雑することもないここは、読書や考えごとの邪魔をされることも少ない。店の経営としてそれはどうなのかと思わなくもないが、彩にとっては理想的な環境だ。

毎日のように通っていけば、おのずと座る席も決まってくる。今日も今日とて昼食を兼ねて店に赴けば、カウンターのいつもの席は残念ながら先客によって占領されていた。仕方なく、一番奥にあるテーブル席を選ぶ。席数の少ないこの店で、一人客である自分がテーブル席に座ってしまったのは、迷惑になりかねないが仕方がない。いつもだったら、カウンターを利用していた。

後から考えれば、この席に座ったこと自体が、全ての発端だった。けれど、その時、その席に座らなければ、何事も起きなかったのだと思えば、まさしくそれが発端だったと言えるのだろう。

「おなかすいたな……」
はあ、と、溜め息をひとつ。

いつもならもう少し早い時間にお昼に入れるのに、今日はいろいろと立て込んでいて誰もお昼を食べに行く余裕がなかった。ようやく時間が取れた頃には昼休みというにはだいぶ遅くなってしまっていた。

だから、ここでゆっくりしていく時間もあまりない。それでも、食後のコーヒーを飲んでいる時間くらいはあるはず。

それは、いつもの日課で、変わらない毎日だった。職場と自宅とを往復するだけの、変わり映えのしない日常。それはつまらないかもしれないけれど、平凡で堅実な生き方だった。波乱万丈な人生を送りたいとは思わなかったし、ドラマに出てくるような恋も、映画のようなスリリングなできごと、今の生活には無縁のことではなかった。

彩はコーヒーを一口飲んで、持って来た読みかけの文庫本を出そうとして頬を引きつらせた。

お気に入りの革製の洪めのブックカバーを掛けていたそれが、何

やら珍妙なイラストのついた紙製のものに変えられている。

「な、何これ……」

全く、身に覚えがない。

いや、こんなくだらない悪戯をする相手の心当たりはある。だが、あまり考えたくない。

（大輔……あのバカ！！）

思い浮かべた幼馴染の顔に向かって、彩は思い切り罵倒を浴びせた。

大輔は彩の実家の隣に住んでいた幼馴染で、今はCG関係の仕事に就いている……らしい。らしい、というのは、あまり興味を持って彼の仕事の話を聞いたことがないからだ。彼の仕事の話を聞こうとすると、どうしてもその延長線にある趣味の話にすっ飛んで行って收拾がつかなくなるので、面倒だからだった。

お互いに実家から出て来て数年、たまに会って近況報告をしあうくらいの付き合いは続いている。とは言え、大輔とは色めいた方向に発展することはまるでない。何故なら、彼は相当のアニメオタクであり、あまりそういったことに興味はないらしいからだ。

昨日だって久しぶりに食事に誘われたものの、終始そんな話ばかりされていたような気がしないでもない。

別に、彼の趣味を馬鹿にしたいとは思わないし、それはそれで勝手にやってくれたらいいとは思うのだが、たまにこういう悪戯をするから頭痛がするのだ。

たぶん、これは、今、彼が関わっているという何とかというアニメのキャラクターだろう。何だかいろいろと細かく説明をされたのだが、右から左に聞き流して終わってしまった。きつと、彩が聞いていなかったのに気づいてこんなことをしたに違いない。

こついうどうでもいい悪戯を、本気でやるのが大輔なのだ。

再び溜め息をつけてそのブックカバーを外そうとすると、挟んであった栞まで同じキャラクターの仕様に換えられている。どこまでも用意周到だ。頭痛がしてくる。

すると、何とも言えないタイミングで携帯がメールの着信を知らせる。相手を確認すると、案の定と言うべきか、この悪戯の張本人だった。

彩が驚いたのを想像しているのが楽しいのだろう。メールの文面は短かったが、やけに楽しそうだ。腹が立つということでもない他愛無い悪戯ではあるが、さすがにこれを会社の人たちに見られてしまふようなことがあるのは気恥ずかしい。彼の仕事をバカにしたくはないけれど、そういう目で見てしまふ人たちがいるのも本当だから、面倒ごとはなるべく避けたかった。

彩はそのブックカバーを外して、丁寧に折り畳んでバッグにしまい込む。それから改めて文庫本を開き、読みかけのページに視線を落とした。

そうして、彩が本の世界に引き込まれようとしていた、その時。

店の扉が、勢いよく開いた。

店そのものの佇まい同様に年季の入った扉は、もちろん、自動で開くようなものではない。時折、雨が降った日などは湿気で立て付けが悪くなり、客を拒否しているのではないかと思うくらいに重くなる代物だ。そして、扉同様に年季の入った鈴が、鳴っていると言うよりも勢いに振り回されて耳障りな音を立てた。

その騒々しさにせっかくの時間を台無しにされたようで、彩は眉をひそめて視線を上げた。どうやら、入ってきたのは若い男らしい。ちらりと窺うが、見知った顔ではない。

どうでもいいか、とばかりに、彩は視線を本へと戻した。その瞬間に、騒がしい珍客への興味は失せた。知らない相手がどうだろうと、彩には関係のないことだ。

うるさい客がこの静かな空間の空気を乱して行くのは不愉快だが、ここは彩の店ではない。彩には客を拒む権利はないし、ほんの一時だけ我慢して、関わらなければいいだけの話だ。

と、彩が我関せずを決め込んでいると。

どかどか、と足音も高らかに歩いてくる音がして、誰かが彩の向

かいの空いた席に腰を下ろした。

「……はあ!？」

相席を頼まれた覚えはない。もし、そうだったとしたら、休憩の残り時間もあまりないことだし、彩は席を立って会計を済ませてここを出てもかまわない。こちらは既に食事を済ませてしまっているのだから、何も問題はない。

「何なの、あなた」

思わずそう言っつてその相手を見やれば、相手は慌てた様子で周囲をきよるきよると見回す。

「ごめん、ちよつとの間だけ、ここにいさせて!」

ね? と、両手で拜むように懇願の姿勢を取られて、彩は思わず黙り込んだ。

向かいに座つたのは、若い男だった。おそらく、彩と同じ年か、それよりも少し上くらいだろう。先ほどの騒がしい珍客は、この男に違いない。

派手過ぎない程度に明るく染めた色の髪を長く伸ばして、後ろ髪を緩く後ろで三つ編みにしいて、何とも目を惹くタイプだ。どこが、ということを引きちゃんと説明はできないが、それをオーラというのならそう呼ぶのかもしれない。言い換えるのならば、存在感がある、とでも言うべきだろう。彩はぼかんとして、目の前に座る男を見つめた。

たぶん、この男は、彩が最も苦手で嫌いなタイプの人間だ。どう鼻屑目に見ても、相容れないタイプであることを本能的に感じて、警戒心だけが頭をもたげる。

本音を言えば、これ以上は関わりたくはない。だが、彼はどいてくれるつもりはまるでないらしい。

彩の目の前にどっかりと腰を下ろして何をするのかと思えば、彼はポケットの中からくしゃくしゃにまるめてあった帽子を取り出して素早くかぶった。そして、そのままテーブルの上で組んだ腕に突っ伏すような形で顔を伏せ、啞然としている彩に向かってにこりと

笑って、小さく人差し指を立てて「静かにね」と言って笑った。

「俺、ちよつとだけ寝るから。だからさ、少しの間でいいから、何も言わないでいてくれる？」

何かを言うも何も、彩には何が何だかさっぱりわからない。どう考えても口の挟みようがないではないか、と思っている彩をよそに、彼は本当に顔を伏せて寝の体勢に入ってしまった。

いきなり人のテーブルに相席を決め込んで、そのうえ、寝るとは何事だ。

腹は立つが、何も言わないでと言われてしまった手前、彩は馬鹿正直に口をつぐむしかない。

相手は見も知らぬ他人なのだから、そんなお願いなど聞いてやる義理も道理もないのだが、妙に律儀な彩の性格では無視することができないのだ。

彩がむつつりと黙りこくつたまま成り行きを見守っていると、またしても年季の入った扉が開かれた。驚いてそちらに目をやれば、半開きの扉から中を覗き込んでいたのは、数人の少女たちだった。

彼女たちは息を弾ませ、きらきらとした視線で店内をぐるりと見回した。

「……いないみたい」

「でも、絶対、見たよ！ この通りを歩いていたのは、絶対、なんだから！ あたしが見間違えるわけないもん。この辺りのどこかの店に入ったのは確か！」

「……この店じゃないんじゃない？ 何て言うか、らしくないし」「うーん、そうかも……。タカくんが選ぶには、地味過ぎって言うか、古過ぎって言うか？」

ここを気に入って通う常連や店主もいる前で、神をも恐れぬ暴言を吐く少女たちは、ひとしきり店内を見回してから顔を見合わせた。「ねえ、やっぱり、この通りを抜けた先にあるシヨップじゃない？

前にさ、どつかの雑誌であそこの服が好きだとか言ってたような気がするし！」

「きつとそうだね！」

彼女たちは騒ぐだけ騒いで、それを謝罪することもなく、慌ただしく店を出て行った。

後に取り残されたのは、その展開について行けずにぼかんとしている客ばかり。彩もその中の一人であることに間違いはなく、騒がしくも厚かましい少女たちに何とも言い難い溜め息をついた。

そのまま日常に戻るには、些か難のある微妙なごちなさを含む空気が漂う。

「……助かったあ」

そんな微妙な空気を完全に無視して、目の前の男が突つ伏していた顔を上げた。向かいにいる彩にも、周囲の状況にも、全く動じていないと言うか、まるつきり意識の外、とても言うべきか。

「ねえ、あの」

彼が何から助かったのかなんて、追及するつもりはない。むしろ、どうでもいい。彩は、一人の時間を邪魔されてすこぶる機嫌が悪かった。

刺々しく声をかけると、彼はきよとんとして彩を見た。

何故、彩が怒っているのか、彼は欠片も理解していなさそうに見える。

「はい？」

「はい、じゃないでしょう！ 用事がないのなら、他の席に行つて欲しいんだけど。見たところ、相席しなければならぬほど混雑しているわけではないみたいだけど？」

「ここは、さほど席数があるわけでもない。だが、昼時を既に過ぎてしまった時間の今、別にわざわざ相席するほど混み合つてはいない。」

用事がないのなら、とつと他の場所へ移つて欲しい。

「何だか、つれないお言葉ですねえ」

「言わせてもらうけど、私にとってあなたは見ず知らずの赤の他人です。そんな人に一人の時間を邪魔される覚えはないし、不愉快で

す。そう言えばわかりますか？」

「……見ず知らず。って、俺のこと、知らないの!？」

「どうして、私があなただのことを知っていなくてはならないの？」

あなたはこの店の常連でもないし、同じ会社の人でもないし、私の個人的知り合いなんかであるはずもない。悪いけど、あなたのように頭に豆腐が詰まったような友人はいないから」

「……豆腐？」

彼はきよとんとして彩を見て、それから、わずかに傷ついたような表情を浮かべた。

一瞬、言い過ぎてしまったかと反省するが、腹立たしい気持ちの方が勝つてしまい、素直に謝罪の言葉は出て来ない。

「ふうん……そっかあ。ねえ、ひとつ、聞いてもいい？」

さすがに怒るかと思っただが、彼は見当違いのことを言い出した。

「え？」

「あのさ、確認するけど、本当に俺のこと知らないの？」

疑うように彩を見やり、言葉を重ねる彼に、彩は更なる苛立たしさを覚えた。

ほんの一瞬前、謝った方がいいかな、なんて思ったことも、吹っ飛んでしまった。

疑われても困る。本当に、知らないのだ。もし、この相手に自分のことを一方的に知られているのだとしたら、気分が悪い。そもそも、そんなこと、念を押されるようなことでもない。

「知らないわよ。用事がないのなら、他へ行ってくれる？ 私は、

本を読みたいの。それを、あなたが邪魔しているのよ」

もう、時間がない。気になる先まで読み進めるつもりだったのに、一行も進めなかったことを思うと更に腹が立ってきた。

「……あのね、俺ね、とうじょうたかき東城貴樹っていうんだけど」

聞いてもいないのにいきなり自己紹介を始めた目の前の男に、彩は怒りを通り越して頭を抱えなくなった。

きつと、この男は馬鹿だ。アホだ。関わらない方がいい相手に、

関わってしまった気がする。

「何度も言うけど、私はあなたのことなんか知らないから」

彩が溜め息混じりにそう返すと、彼はにこにここと笑った。それも、やたらと嬉しそうに。

「うん、だから、自己紹介！ 何か、新鮮で嬉しくて！」

「は？」

「ねえ、俺と友だちになつてよ！」

「……はあ？」

貴樹、と名乗った彼の唐突な申し出に、彩は面食らって聞き返した。

何だか、嫌な予感が、する。

「いや、ほら、こうやって出会ったのも、何かの縁ってことで！」

あ、ねえ、携帯貸して！」

いいとも悪いとも言っていないうちに、テーブルの上に放り出していた携帯を取り上げられ、勝手にいじくられ、メールアドレスの交換、とやらをさせられた。図々しいにも程がある。帰ったら速攻削除だ。

「はい、俺のアドレスも登録したから！ 彩っていい名前だね！」

上機嫌で携帯を返されるが、対する彩の機嫌は降下一直線だ。人が反応できないでいるうちに勝手に個人情報を見られたこの状況でにこにこしていられる人間がいたら、ぜひともお目にかかってみたいものだ。

「ねえ、あなた、どういうつもりなの」

「どういうって……だから、お友だちに」

そう言った貴樹の眼差しが、テーブルの上に放り出してあった栞の方に吸い寄せられる。

「スイートキューティ！」

「は？」

「ねえ、スイートキューティ好きなの！？ 俺も大好き！ いっぱいレア物持つてるよ！」

「ごそごそとポケットを探ると、貴樹は似たようなゴミ（彩にとつてはまさにゴミだ）を、ざらりとテーブルの上に広げた。それは、いわゆるフィギュアと呼ばれる類のものだろう。小さめのデフォルメされたタイプのもので、あれこれ種類があるらしいことを大輔が誇らしげに言っていたことを思い出す。

そうしてから初めて、貴樹が口にしたスイート云々が、まさに大輔が言っていたキャラクターの出てくるアニメのタイトルであったことを思い出した。

「お近づきの記念に、これ、あげる！」
要らない、と言いつ返す気力も失せた。

最初に、豆腐が詰まっている、なんてひどいことを言ってしまったような気がしたが、それは、豆腐に対して失礼な気がしてきた。それ以上に、何と言うか、本気で関わらない方がいいように、思える。

おそらく、黙っていれば女性からはもてはやされる顔立ちなのだろう。こういう派手なタイプは彩が苦手とする相手だから、私生活で接点があることはまずありえない。本能的に拒否してしまうからだ。

頼むからあまり喋らないで欲しい。大輔の話を聞いているよりもひどい頭痛がしてくる、と、思ったものの、それを口に出せば猛然と反撃して来そうだから、やめておいた。

このまま無視してしまうかどうかどうするか、悩んだところで勝手に登録されてしまった事実は消せない。さすがに目の前で消すということをするのは気が咎めるから、持って帰って、知らない所で存在を消去するしかあるまい。

「じゃあ、後でメールするね！」

と、自分勝手な言葉を言い残して、彼は実にさりげなくスマートフォンに彩の分の伝票を持って行き、それを支払って出て行った。

そのあまりの自然な行動に口を挟むこともできずに見送ってから、彩は我に返る。

ひよつとして、それほど嫌な奴でもないのだろうか。いやいや、あれは警戒するべき人種だ、とぐるぐる考えながら、彩は最後の「ヒ」を飲み干したのだった。

そいつからメールが来たのは、その夜のことだった。

彩はシャワーを浴びて出てきたところで、メールの着信を告げるように点滅する携帯に気づき、携帯を開いた。たまに来るメルマガかと思いきや、メールの送信者の欄には、昼間の豆腐野郎の名前がある。

あの男は、ちゃっかりと自分の名前も登録しておいたらしい。

そのまま削除してしまおうかとも思ったが、さすがにそれは悪いような気がしてやめた。いくら何でも、読みもしないで削除はひどい……かも、しれない。存在ごと消去しようと思ったのは事実だが、成り行きで奢ってもらってしまったのも事実で、何となく気が咎めてそのままだった。

とは言え、昼間のあの様子からすると、いきなり馴れ馴れしい文面がある可能性もある。彩には理解できない顔文字だとかが乱舞していそうな、そんなイメーজだ。

だが、恐る恐る開いたメールには、昼間の印象とはまるで違った丁寧な文章が並んでいた。

それは、昼間の自分の行動の非礼を謝罪する文章から始まっている。そして、そのお詫びとお礼とを兼ねて食事をご馳走したいので都合のいい日程をいくつか教えて欲しい。その中でこちらが合わせられる日程をお知らせします、と結ばれていた。

昼間の印象からはまるで別人のような、丁寧で落ち着いた言葉で書かれたそのメールに、彩は考え込んでしまった。

あの外見や行動と、このメールの礼儀正しさとが、どうやっても結びつかない。

あれで、意外と生真面目だったりするのだろうか、とは考えたものの、彩は返信メールを書くことはなかった。何を書いていいのかもわからなかったし、いきなり食事に誘われても、どう反応してい

いか困ったからだ。それに、スイート何とかの話を食事中に延々とされても嫌だ。そんな話題で盛り上がるのは、大輔だけで充分である。彩には、それ以上その話題を受け入れるキャパシティはないのだ。

放っておこう、と決めて、彩はそのまますっかり忘れてしまっていた。

彼から二通目のメールが来たのは、それから、十日ほど後のことだった。

そのころには彩は彼のことなどすっかり忘れていて、誰だこいつ、の一言で切り捨ててあっさり削除するところだった。

寸前で気づいてメールを開くと、前回と同じようにあの時の様子からは想像もつかないような几帳面な文面が、そこに綴られていた。その内容は、返事がないことから、彩が怒っているのではないかと心配しているものだった。おろおろしているのが画面越しに伝わってくるようなそれに、彩は思わず笑いそうになる。

最後に、同じように食事を誘う言葉があり、このメールに返事がない時は、今度こそアドレスも名前も全て削除するので心配しないで下さい、と付け加えられていた。どうやら、本気で彩が怒っているのだと解釈しているらしい。

「……気にしているらしいのは、意外かな」

そんなことを気にするようなタイプには、見えなかった。何しろ、初対面がアレで、第一印象としては最悪の部類に入る。見た目の派手さも手伝って変な先入観を持っていたが、もしかすると、思っていたよりもずっと真面目に物事を捉えている人間なのかもしれない。だとすれば、豆腐などと称してしまっただけが悪かったかもしれない、と彩は少しばかり反省した。

とは言え、そもそも、そんな印象を与えるような真似をしたのは向こうなのだから、それはそれで仕方のないことだ。

だが、第一印象をいつまでも引きずっていても、こんな生真面目にメールをしてくる相手には失礼だ、と考え直す。失礼な相手に払

う礼儀はないが、礼儀正しく接してくる相手には相応の返事を返すのが礼儀だ。

そうになると、最初のメールを無視してしまう形になってしまったのが、少しばかり気が咎める。

彩は少し考えてから、東城貴樹宛てに簡単にメールを書いて送信した。

返事が遅れたことへの謝罪と、食事を誘ってくれたことへのお礼。都合がつく日をいくつか選び出して書き添えただけの、事務的なメールだ。さすがに、最初に来たメールの存在すら忘れていましたと正直に書くことはできず、返信が遅れたのは私生活が忙しかったせいだ、ということにしておいた。その方が角も立たない。

意外と、あれでもただの馬鹿ではないのかもしれない。

送信を終えた携帯を閉じると、彩は明日に備えてさっさとベッドに入ったのだった。

その、頃。

都内某所にある放送局の控え室で、貴樹は携帯を睨んで考え込んでいた。

ついさつき、ずっと待っていたメールが来たものの、開いて読む勇気がないのだ。

「……………何やってるの、貴樹」

「いや、別に……………」

「さつきから携帯睨みつけているけど、睨んでいるばかりじゃメールは来ないわよ。それに、もうすぐ本番なんだから、気持ちはずちやんと切り替えてね」

「……………はあい」

本番を前にして嫌なメールを見て凹んでしまうのはどうかと思っ

だが、二時間もある生放送の間、メールの内容が気になってそわそわしているというのは、もっとなんと性質が悪い。気合を入れてメールを開いて見ると、それはたいして長いものではなく、内容も、貴樹が恐れていたほど辛辣なものではなかった。

貴樹はあからさまに安堵の溜め息をつき、早く用意をしると急にきたマネージャーが不思議そうな顔をするのを、笑って誤魔化した。

「よっし、東城貴樹、いざ出陣！」

「……あんまり最初から飛ばさないでよ。二時間もあるんだからね。途中で燃料切れとかしたら、シャレにならないでしょ」

「わかってますよー」

これから臨むのは、毎週レギュラーで受け持っている、深夜のラジオだ。これから、二時間の生放送。最初から飛ばして行ったら、途中でテンションが落ちてしまうのは目に見えている。これまでの経験でそういう痛い目を見ているから、マネージャーが警戒するのも理解できなくはない。

普段なら、そんなマネージャーのお小言に少しばかり苛立ちを覚えるところだが、今日は気分がいい。これなら、最初から最後まで高いテンションを保っていられそうな気がする。

貴樹は所定の位置に座ると、いつも以上に調子よく喋りだした。

「皆さん、こんばんはー！ REAL MODEの東城貴樹です！今夜も都内某所のスタジオから、完全生放送でお送りします。これから二時間、俺のお喋りにお付き合いください。まずは一曲目、REAL MODEで、？テクニカル・ジョーカー？をお聴き下さい」

今現在、世間では大人気のはずのプロデューサー・ユニット、REAL MODE。そのメイン・ヴォーカルであり、プロデューサーである天宮順平あまみやじゅんぺいを核とした製作集団が世に送り出す楽曲を歌うための、唯一のメンバー。それが、東城貴樹だ。

時間に追われるばかりの殺人的スケジュールを笑顔でこなし、ど

んなに突っ込んだインタビュも得意な軽妙なトークではぐらかす、最近のヒットチャートの常連。成人男性としてはやや小柄な部類に入るが、整ったルックスと生まれ持った天性の声の魅力は人々を惹きつける。バラードで甘く囁くような甘い歌声を披露したかと思えば、次のロックナンバーでは叩きつけるような力強いシャウトを聴かせる、魅力溢れるヴォーカリスト。

しかし。

彼の実態は、たとえば、あまり大きな声で吹聴できるような代物ではなかった。彼を楽曲やインタビュでしか知らないファンが聞いたとしたら、滂沱の涙を流してイメージを狂わされたと嘆くに違いない。

彼は、ただのオタクだった。アニメやゲームの美少女をこよなく愛し、二次元の美少女を『俺の嫁』と宣言し、たまのオフには溜め込んだアニメの録画を見るか、アキバに行つてエロゲやフィギュアを買いあさるような人種である。どこからどう見ても、真性のオタクにしか見えない趣味だ。

今の絶賛のお気に入りには、スイートキューティというアニメだ。いわゆる魔法少女ものの範疇だが、深夜帯に放送していたアニメだから、厳密には子供向けではない。魔法少女という響きで侮つて見ていると、痛い目を見る深い話だ、と、貴樹は思っている。その中でも、貴樹はヒロインの親友ポジションにいる『あすか』が気に入っていた。今現在の『俺の嫁』だ。

もちろん、そんなことを表立つて喋つては、せつかく作り上げたイメージが崩れる。マニアの常とでも言うべきか、元来はお喋りな貴樹ではあったが、言いたいことの半分も言えないのでは身体に悪い。にっこり笑つて用意された台本を読むことを了承してはいても、もやもやとしたものは確実に増えて行く。

ああ、これがストレスつてヤツなのかな、と、思ってしまうのは仕方があるまい。

（大体さあ、俺を流行に乗せようつてのが無茶な要求なんだつての。

自慢じゃないが、俺の家のテレビはゲーム画面とアニメしか映さ
のだぞ。イメージが崩れるから喋るなって言われても、俺がオタク
なのは変えようのない事実だったのを認めるよな……。アニメとエ
ロゲが好きで悪いのか。人に迷惑かけてるのか？ そもそも、そん
なのがばれて離れて行くようなファンなんて、俺のことなんかそん
なに好きじゃないのさ)

流れる自分の曲を聴きながらいいじとそんなことを考えている
自分の後ろ向きな思考も、実は嫌だ。だから、マネージャーのいう
ことにも一理あると思って、おとなしく従っている。完全に彼女の
言葉を否定できないからこそ、納得できない部分があっても従う
べきだと判断しているのだ。

歌うことは、好きだ。

歌は自分の天職だと、思っていることも本当だ。

だから、ここで失敗して終わりたくない。自分の趣味を知られる
ことは痛くも痒くもないが、それが原因となって歌えなくなるとい
う未来があると考えるのは、ぞつとする。

それだけは、絶対に嫌だった。

とは言え、発言を制限される生活はかなりのストレスをもたらす
ことに、違いはなかった。趣味のことになると普段の何倍も饒舌に
なってしまう貴樹としては、かなり辛い。ふとした拍子に、うつか
り爆発してしまいそうになることもある。

正直になれる場所が欲しい、と思うことがある。自分をただの『
東城貴樹』とだけ見て、話をしてくれる、そんな友だちが欲しかっ
た。素の自分に帰ることができるのが、隠れアカウントでつぶやく
ツイッターだけだというのは悲しすぎる。

そりゃ、地元に戻ればそういう友だちはいる。こんなに有名にな
る前にできた友だちだって、少ないながらも存在する。それでも、
彼らは『REAL MODEの東城貴樹』を知っているわけで、当
たり前のことでも少し寂しい。

(あれだけテレビに出ているのに、俺のことを知らない人もいるん

だな……)

貴樹自身、自分はそれなりにトップに近い場所にいると思っ
た。

それは自惚れでも何でもなく、事実として存在しているものだっ
たからだ。テレビに出ていない日なんて数えたこともないし、そう
ではない自分なんて、今は考えられなかった。

なのに、彼女は自分を知らないと言った。あの言葉に、嘘があっ
たとは思えない。おまけに、頭に豆腐が詰まっているとまで言っ
てのけたのだ。

腹が立つよりも何よりも、純粹に疑問に思った。

あれほどまでにテレビに出ているのに、自分を知らない人間がい
ることへの、純粹な疑問だ。けれど、それはすぐに興味に変わり、
その気持ちは、今や何とも表現し難いものになりつつある。

最初は、彼女が自分を知らないということに、本当に驚いたのだ。
迂闊に一人で出歩くと、即座にとんでもないことになるのは経験
済みだ。さすがにそんな場所にいるとは思われないのか、アキバで
うろついている時に見つけられたことはないが、普通に歩いていて
見つかることはよくある。一応、変装らしきものをするにはする
のだが、ファンにかかればそんなものはあってもなくても同じこと
らしい。この前、彩と初めて会った時にしても、一人でぶらぶらし
ていたらファンに見つかって追い回されて、どうにか逃げるために
飛び込んだのがあの喫茶店だった。

イメージされている東城貴樹であれば、絶対に立ち寄りそうな
い場所。咄嗟に考えたにしては、成功だったと思う。当然、あの後、
きちんとお店に連絡をして、迷惑をかけたことを告げ、謝罪はした。
迷惑をかけたのは事実だから、謝るべきところは間違えてはならな
いからだ。

彼女は……彩は、おそらく、あの店の常連なのだろう。あそこで
過ごす時間を邪魔されて怒っていたようだから、そうに違いないと
思う。

あまりテレビを見ない人なのかもしれない、とも考えたが、それにしても、まるで認識されていなかったのが嬉しいのか悔しいのかよくわからない。

貴樹が出演しているのは、何も音楽番組に限ったことではない。バラエティだとか、トーク番組だとか、もらえる仕事にはできる限り応えたいとは思っている。何より、CMだってそこそこ出ているはずなのに、それすら認識されていないというのも何とも言えない。彩は、よほどテレビを見ない種類の人間なのだろう。

だが、考えてみれば、そういった相手は貴樹にとって貴重な存在だった。いろいろと聞かれずに済むし、イメージと違うことを口走ったとしてもがっかりされたりはしない。うっかり『俺の嫁』の話をして、苦笑されるだけでドン引きされることはないかもしれない。

世間に与えているイメージには気を使い、と口をすっぱくして言われているのだ。鬼のようなマネージャーからは。

この放送が終わったら、ちゃんとメールに返事を書こう。と、貴樹はいつになくうきうきしながら思った。

彼女は、食事は何が好みだろう。

生放送中だというのに、貴樹の頭の中はお花畑だった。

まずは、友だちになることから始めよう。そして、彼女が自分の趣味に寛容であれと思う。スイートキューティのグッズを持っていくくらいだから、吐き気がするほどオタクを嫌悪しているとか、そういうことはないと思いたい。

その先にどうなるかはわからないまでも、貴樹は、そう決意したのだった。

(……メール？ こんな朝っぱらから、誰？)

彩が朝起きてから携帯を覗くと、メールが来ていた。

送信時刻を何気なく見てみれば、午前四時半。普通の生活をしているのなら、夢の中だ。どういう生活サイクルの持ち主が、こんな少々常識はずれな時間帯にメールを送ってくるのだ、と思えば、差出人の欄は東城貴樹になっていた。

彩でなくとも、首を傾げたくなるのは常識の範疇で生活している者としては、当然のものだと思いたい。昨夜は多少なりとも感じていた罪悪感が、微妙に吹っ飛んでしまいそうだ。

少しすつきりしない頭でメールを開いて見てみると、最初に来たメールとほぼ同じ内容だった。要するに、食事に誘っているものだ。彩が都合のつく日程を書いたものだから、早速日時と場所を指定する旨が記されていた。

「……どうしろと」

指定されている日時は、明日の夜。予約はして話は通しておきますのでご心配なく、なんて、紳士めいた言葉まで添えられている。ここまでされているのに、今更無視すると言うのも気が引ける。

彩が思っている以上に、向こうがこの前のことを気にしているらしいことが伝わってくるからだ。

だが、問題は、向こうが指定してきた場所だ。

意外すぎて戸惑う、とでも言えばいいのかもしれない。急にこんな場所に呼び出されても、困る。第一、彩はこんな場所には縁がない。

指定されたのは、いわゆる一流ホテルのレストラン、だ。

名前は聞いたことがあるが、ここには行ったことはない。行くところだと思っただけでもない。職場の研修で一応のマナーは叩き込まれているから、こうした場所に呼ばれて不自由を感じることはないが、問題はそこではない。

こんな場所に呼び出して何がしたいのか、彩にはさっぱり理解できない。第一、このレストランの値段は卒倒しそうなものがついていたような気がするのだが、どうしろと。

「……これは、もちろんあいつの奢りなんだよね……？」
でなければその場で帰る、とつぶやきながらも、彩は簡単にメールを打って送信した。

返事は、たった一言だけ。「わかりました」だった。

「……どうしろって言うんだろう……」

指定されたレストランの入り口を、物陰からちらちらと伺いつつ、彩は一人つぶやいた。

何と言うか、気後れして入れない、とでも言おうか。

正直に言っつて、このような場所には不慣れだ。普段の自分には、縁遠い場所。一応、事前に調べてみたが、ドレスコードなどは間違いはないはずだ。さすがにジーンズで来るような常識はずれな振る舞いはしていないから、大丈夫だろう。それでも、敷居が高いことに変わりはない。

ここに来るまでに何度となく帰りたいたいと思っつたが、一度約束してしまっつたからには破るのは人として何か間違えている気がする。

柱の陰に隠れて深呼吸を繰り返し、気合を入れ直して入り口に近づいて行く。

「いらっしやいませ。ご予約はなさつておられますか？」

「……あ、えーと、待ち合わせなんですが……。三枝彩さえくみあやといひます」

貴樹からのメールにあつた通りに名乗れば、彼は既に心得ていたようつで、即座にうなずいた。

「東城さまのお連れさまですな。承つております。東城さまは既にお待ちですので、ご案内いたします」

素知らぬふりを装つて案内を受けながらも、彩は内心で少々うろたえていた。

頭の中は、あの、貴樹と名乗つた男の正体について何通りもの仮説がぐるぐると回つてひる。だが、明確な答えのビジョンは見えてこない。謎過ぎるのだ。

最初に受けた、頭のねじの緩んだ男の印象。そこはかとなく、派手に見える外見。そして、メールから受けた意外と生真面目そうな印象。そのうえ、選んだのがここだ、という事実。

さっぱりわからない。

わかるのは、貴樹が最初の印象とは違う男だ、という客観的事実くらいだ。

いろいろと考えていると、ますます彼が何者なのかがわからなくなる。だが、それについて、誰かが答えをくれるわけでもない。かと言って、本人に直接尋ねるというのも、どうにも気が引ける。

彩が悩んでいるうちに案内の者が立ち止まり、指し示された先は奥まった場所にある個室だった。

（個室、なの！？ どういうこと？ あの人、何者？）

ますます、ワケがわからない。

第一、こんな所、あんな程度のことと初対面に近い相手を誘う場所ではなからう。場違いも甚だしい。このまま帰ってもいいだろうか、と思いつながら、彩は引き返せないまま開かれたドアの向こうへと足を踏み入れた。

「いらつしやあい」

ドアの向こうから彩を出迎えたのは、すつとんきょうな声だった。場所は高級感に溢れていても、本人の雰囲気はそうでもないらしい。けれど、それは彩の期待を裏切らないものでもあって、何となくほっとした。どんな場所であろうとも、彼は彼なのだ。彩が受けた印象のまま、そこに彼はいた。

ここの雰囲気、どうにも思っていたものとは違って、知らず緊張していたのかもしれない。それが、貴樹の周囲とはそぐわない態度で少しだけほぐれた。

「来てくれてありがとう！ すつごく嬉しいよ！ もしかしたら、二度と会ってもらえないかと思ってたから！」

にこにこしながら、正面のテーブルに座った貴樹が彩を見ている。

ほら、座って座って、なんて促されて、彩は内心どうするべきか迷いながらも、貴樹の言葉に従うしかない。

やはり、場違いだ。

こんな場所で、二人で個室にこもるなんて、何だか誤解して下さ
いと言わんばかりな気がしてならない。誰の誤解を警戒しているの
かと言われてもわからないが、何となく、そんな気がした。

「ごめんね、俺の都合のいい場所に呼び出したりして。あ、でも、
変なことは心配しないでもいいよ。ここはよく使う場所だし、俺の
事情も知っているからさ。ちよつと事情があつて、大勢の人がいる
所で食事をするのが苦手なんだよね。あ、それで、何がいい？ 俺
勝手にコース頼んじゃったんだけど、苦手なものとかあつたりする
？ 変えなくてもいいなら、ここからワイン選んで」

一人でマシンガンのようにまくし立てて、貴樹は手にしていたワ
インリストを彩へと差し出した。

彩はそれに圧倒されつつも苦笑して、そのリストを軽く押し戻す。
「悪いけど、私、あまりワインが得意じゃないから」

「あ、そうなの？ じゃあ、飲みやすくして料理に合うものを適当に
持ってきて」

リストを店員に返しながらそう言つて、貴樹は落ち着きなさそう
に視線を宙にさまよわせた。

こついつた場に慣れていることは事実のようだが、落ち着きがな
いのも、また彼の揺るぎない事実なのだろう。

席について少しばかり冷静さを取り戻すと、周囲のことを考える
余裕も生まれてきて、彩はじつと貴樹を観察する。

初めて会つた時の印象の通り、基本的に落ち着きのなさそうな頭
のネジが緩んでいそうなタイプだ。そこはかとなく派手な印象を受
ける見た目も、変わらない。だが、メールの文面の印象は違つてい
て、彼はとても生真面目な人間に思えた。

テーブルの上で組まれた、男性にしては細くてしなやかな指が落
ち着きなく動く。右の中指に嵌められた大振りのシルバーのリング
は、決して邪魔にはならず彼の趣味のよさを教える。身に着けた
スーツは黒を基調にした品のいいもので、シルバーのアクセサリー
がそれにわずかな華やかさを添えていた。

印象が、一致しない。

それがいいのか悪いのか、彩にはよくわからないままだ。

「ここね、結構美味しいんだよ。俺、何度か来ているんだけどさ、個室もあるから落ち着いて食事ができるし、人の目も気にならない。きつと、君も気に入ると思うな」

どういうわけか、貴樹はやたら上機嫌だ。落ち着きなく喋っているのは変わらないけれど、不機嫌そうに黙り込まれるよりはよほどいい。

「えつと、それじゃ……自己紹介、ちゃんとした方がいいかな。俺は、東城貴樹。年は……えつと、二十七！君は？」

と聞いてから、貴樹は「あつ」と声を上げた。

「女性に年齢を聞いちゃいけないだった……」

それまではしゃいでいたのが、急にしょんぼりとして貴樹は肩を落とす。

「ごめんなさい、今のなしで」

「……別に、気にしませんよ。でも、答えません」

二十七ということは、彩よりも四歳は年上だ。意外と年齢が上だったことに驚いたが、それは黙っておくことにする。

「えと、怒っていませんか……？」

「怒ると言うなら、前回のことの方が失礼だと思いますけど。あれについて、言い訳とかはないんですか？」

少し意地の悪い言い方をしてじろりと視線を向ければ、貴樹は目に見えてうるたえた。

「……えーと、あれは……その、ちょっと、事情が。いろいろと込み合っていて、そのう……」

あくまでも、詳しい事情を話すつもりはないらしい。それでも、目を伏せてしどろもどろになりつつも、貴樹は反応を伺うように彩を見る。その様子がまるで飼い主のご機嫌を窺う犬のように見えて、彩は思わず噴き出してしまった。

犬だ。

犬がいる。

一度そう思ってしまうと、彼のうなじで揺れる緩く編まれた三つ編みが尻尾にしか見えて来なくなってしまうと、笑いが止まらなくなる。

「え、えつ、何で笑うの!？」

途端におろおろとし始める貴樹に、更におかしくなる。

我ながら不躰だったな、と反省しつつも、彩は笑いすぎて目尻に滲んだ涙を拭った。

「……いえ、ちょっと、おかしくて。あなた、犬っぽいって言われることがないですか？」

「よくわかるね！ いつつとも言われる！ 血統書つきのバカ犬だとか、そういうふうには」

それはバカにしているのと紙一重のように思えるが、確かに、その喩えは間違っていない。どう見ても、彼の印象は犬にしか見えな

い。
わふわふと尻尾を振りちぎりながら押し掛かってくる、愛想はいが少しばかり頭の悪そうな血統書付きのもふもふだ。

何だか、いろいろと力が抜けてしまった。

本当は、この前のことを追及してやろうかと思っていたのだ。いきなりあんなことをされて、一人の時間を邪魔されて、その理由くらは聞いてみたいものだ、と。

だが、どうでもよくなってきた気がする。と言うよりも、毒気が抜かれてしまった、とでも言うべきか。

「えつと……あの、この前は申し訳ありませんでした!」

いきなり、貴樹はがばつと頭を下げた。驚く彩を見上げて、困ったように小首を傾げる。

「もう、怒ってない……よ、ね……?」

ダメだ。

犬に、負けた。完敗だ。怒っていたとしても、こんな表情を見せられたら全てがどうでもよくなる。

「……今でも怒っていたら、こんな所にこのこ来たりはしないと
思いますけど」

「よ、よかった……！」

本気でほっとしたらしく、貴樹はふにやりと相好を崩した。

黙っていればそこそこにカッコいい部類に入るだろうに、喋ったり笑ったりするだけでイメージが変わる。たぶん、彼はそれなりにもてるのだろうな、と、彩は思った。

だが、そんなもてる男が、何故、自分を食事に誘うのか。

先日の謝罪という理由があるにしても、それならば、何も個室で
ディナーでなくとも充分だ。

やがて料理が運ばれてくる頃になると、彩は何だか疲労感さえ覚えてしまう。従業員は仕事だからこっちが気にするほど人のことなど見ていないのだろうが、やはり、こんな個室でディナーというのは、気の張るものでしかない。

「……あれ、こういうの、嫌い？」

彩の様子に不安になったのか、またしても急にしょんぼりした声
音になった貴樹が妙におかしくて、彩は慌てて首を横に振った。

「そういうわけではないです。ただ、こういう席って慣れていない
から、緊張してしまっただけ」

「そうかなあ。でも、彩さんは可愛いから、誰も気にしないと思う

よー」

「はあ？」

その切り返しは、意味がわからない。可愛いと言っのなら、犬っ
ぽい貴樹の方がよほど可愛く見える。

おそらく、貴樹には悪気がないのだろう。純粹に褒めてくれてい
るのだから、わかる。

「……えっと、ごめんなさい」

「え、何で謝るんですか？」

「だって、俺、今、すごく不躰なことしたよね。本当は、彩さんが
ここに来てくれたことだって、俺は感謝しなくちゃならないのに、

勝手にべらべら喋って……。何か変なこと考えているって思われちゃうかな、って」

「変なことって」

「誓って！ そんなこと、ないから！ 俺、自分が胡散臭い外見なのは知ってるし、たぶん、この前のことで彩さんには迷惑かけたから、俺のこと信用ならないって思われても仕方ないとは思ってる。

でも、俺は、彩さんと友だちになりたいんだ。そういうのは、ダメ……ですか。あ、いや、その、えと、だから」

言い訳をしているうちに、自分でも何を言っているのかわからなくなってきたのだろう。貴樹は時折首を傾げながらも懸命に言葉を重ねて来る。

その様子は、まるで宿題を忘れたことに対しての言い訳を一生懸命に考えている子供のようで、彩はまたしても噴き出してしまった。

「……あの、彩、さん……？」

「何だか、東城さん、最初とすぐイメージが違いますね」

「え、そ、そうですか？」

妙にそわそわとしとしている貴樹に苦笑する。何をそんなに慌てているのか、不思議でたまらない。こんな場所に呼び出されて二人きりになって、警戒して挙動不審になるとすれば、彩の方だということ。

「最初はね、すごく頭が悪そうに見えましたから……その、あんな感じでしたし」

「う、ごめんなさい」

「それは、それぞれに事情があることだから、別にいいんです。でも、あの時、いきなりフィギュアとか出したでしょう？ それで、何だか怒っているのもバカバカしくなって来ちゃって」

「ふおえ」

いきなり、貴樹が変な声を出す。どうやら、ワインでむせたらしい。だが、すぐに気を取り直したように口を開いた。

「あ、あれは、厳密に言うとフィギュアじゃなくて」

「は？」

何となく不穏な単語が飛び出してきたことに、彩は眉をひそめる。この会話のパターンは、大輔とのそれを思い起こさせる。彼が延々と大好きなあれそれについて語り、彩はハイハイとひたすら相槌を打って話を合わせるという、微妙な苦行の。

大輔のことは好きだし、大事な幼馴染だ。彼の好きなものをバカにするつもりもないのだが、さすがにそればかり聞かされるのも疲れて来る。

スイート何とかというアニメは、大輔にとって大切な作品なのだ。あれは、彼がキャラクターをデザインしたもので初めてそこそこにヒットした作品で、彼はものすごく大事にしている。その愛情が行き過ぎて、時折、理解不能なほどに。貴樹の最初の反応からしてあれが好きなのは確かだろうから、大輔が知ったら小躍りして喜ぶに違いない。二人揃ったら鬱陶しいことこの上なだそうだが。

「あ、いや、その」

彩の反応が気にかかったのか、貴樹は目に見えてうるたえた。大輔もそうだが、話はしたいが馬鹿にされたくはないという葛藤があるのだろう。

「大輔が……ああ、大輔つてのは私の幼馴染ですけど、あなたが見つけたあの琴、あれは、彼の悪戯なの。だから、私自身は興味があるわけではないんだけど……あなたがあれに反応したのが、ちょっと、面白かったんです」

「幼馴染……」

「うん、そう。私は詳しくないけど、彼、みさかだいすけ御坂大輔つて」

「まさか、キャラデザのミサカダイスケ!？」

言いかけた彩の台詞を遮り、貴樹が叫んだ。

「たぶん、そうだと思う……けど……」

いきなり目をキラキラとさせ始めた貴樹に、彩は面食らう。それまでもにこにことしていたのは変わらないが、これまでとは表情がまるで違う。そんなにもスイート何とかが好きなのか、と、的外れ

なことで感心してしまう彩である。

「けど、そんな彼の変わりようが可愛いとも思った。」

取り澄ましたような表情も、派手に見える軽そうな外見も、全て吹っ飛ばしてしまうほどに、その表情は彼の素を現しているように思えたからだった。

「さ、サインとか、もらえたりする！？ ああ、でも、そんな図々しいこと言ったら俺は人として」

「そ、そんなに好きなの？」

「そりゃ、好きだよ！ あすかたんは俺のよ」

そう言いかけて、貴樹ははっとしたように口をつぐんだ。そこで、ちょうどメインの料理が運ばれてきたからだ。

慌てたように周囲を見回して、貴樹は居住まいを正した。そこには、ほんの少し前まで興奮していた彼の面影はどこにもない。子供のように目を輝かせて大輔のことを聞いてきた彼は、一瞬でその姿を引っ込めてしまっていた。

それが、少し寂しい気がした。そうやって取り繕ってしまうのは、大人の処世術なのだろう。そういう趣味を堂々と言うことは恥ずかしいとされるのが一般的だから、きつと、彼もそう思っていることなのだ。大輔のようにそれを仕事にし、いつでも胸を張って話している人の方が少数派なのだから。

せっかく会話が進むうちとしていたのに、途切れてしまっていた。

メインを運んできた従業員が席を外しても、今更、同じ話を始める空気はどこにも見つけられない。

そうなってしまうと、美味しいはずの料理も味気なく感じてくるから不思議だった。

どうするべきか、もう一度どうにか会話の糸口を探すべきか、とさり気なさを取り繕った顔で思案している彩の前で、貴樹は貴樹で、全く別のことを考えていた。

(どうしよう、俺、調子に乗って馬鹿なこと口走った……!!)

表面上は呑気な様子を取り繕ってはいても、貴樹の心中は最初か

らかなりの不審者モードだった。もし、貴樹の心の中を覗ける人間がいたとしたら、即座に通報されてしまいそうなくらいに。

それが、彩が『スイートキューティ』の話題を出してきたことで一瞬、素の自分が思いっきり出た。隠しようもなく、出してしまった。

いや、もとより彩に対して隠すつもりもないし、最初のアレではれてしまっているのだから、今更なのかもしれない。それでも、今日だけはカッコよくスマートに印象付けようと思っていたのに。

彩の幼馴染の話に思わず食いついてしまったのは、ファンとしては仕方のないことだと認める。貴樹ではなくとも、ファンであればあの状況で興奮せずにはいられないだろう。何しろ、キャラクターデザインを務めたミサカダイスケは、ファンにとっては神なのだ。

だが、あれでは、まるでそれだけが目当てのバカなオタクではないか。もし、彩にそう思われていたとしたら、地球の裏側まで穴を掘って埋まってしまうたい。

あそこでメインが運ばれてきて、正直、助かった。咄嗟に口をつぐみ、不自然な形で会話は途切れてしまったが、あれ以上の失態を披露せずに済んだからだ。もちろん、ここはREAL MODEの東城貴樹で来ることも多々あるわけで、そんな話をしていたことが面白おかしく吹聴されてしまっても困る、という事情もある。けれど、こういう場所の従業員は洗練されているから、客の個人的な会話の内容までを外に漏らすようなことはないはずだと思っただけも、警戒だけは怠らない。それは、ここ数年の生活の中で身に着けてしまった、悲しいまでの習慣だった。

そんなことばかりを考えていたから、貴樹だって、ちっとも味なんてわかっていなかった。

美味しいでしょ、と、もっともらしく尋ねてはみるけれど、尋ねた貴樹自身が美味しいのかどうかもわかっていないのだから、何とも頼りない限りである。

立場上、華やかに思われがちだが、貴樹はあまり恋愛には縁がな

かった。イメージという問題もあるし、スケジュールも詰まっているから、安易に女性とは付き合えないという理由もあるが、そもそも、知り合う機会がない。

こんなふうに出す前には、それでも、恋人がいた。だが、人気が出るにつれてスケジュールが過密になり、自然に彼女と会う時間も減って行き、あまり連絡を取れないでいるうちに愛想を尽かされてしまった。彼女は、？REAL MODEの東城貴樹？という存在には重きを置いていなかった。それどころか、価値があるとは思っていなかったのだろう。人気が出たら捨てられたも同然だから、きつと、そうだったのだ。

人気が出たことで、知りもしない女の子から声をかけられることは増えたのに、彼女はいなくなってしまったから。

彩とそういう関係になりたい、とか、今のところ、そんなことまでは考えていなかった。彩は可愛い顔立ちをしていたし、貴樹のことを芸能人というフィルターで見ない。たぶん、さっきの発言だって笑って流してくれる。そんな気がする。だけど、そうだからと言って、今すぐ彼女に恋するかと言えば、それはわからなかった。

それでも、予感がした。

きつと、自分は彼女を好きになる。そんなひそやかな確信が生まれるのに、時間は要らなかった。

結局、双方がぎこちないままの食事は、それなりの会話を成立させ、最後には次の連絡をするという約束を交わして終わりを告げた。それは、貴樹にとって想定外の成果であったことは、言うまでもない。

3 (後書き)

貴樹が持っていたのは、フィギュアではなくねんどろいど。

その、翌日のこと。

貴樹は、事務所です次のツアーについての打ち合わせをしていた。ツアーについて回るサポート・メンバーとの最終的な打ち合わせや、総合プロデューサーである天宮も交えての最終確認など、やることは山のようにあった。

ツアーの日程は、もう随分と前から決まっていたことで、チケットはファンクラブ内だけでほぼ完売状態と聞いている。一般発売がこれから行われる場所もあるらしいが、それで手にすることのできる人数は限られているらしい。

本格的なりハーサルに入るまでにはまだ時間があるが、既に秒読み段階と言ってもいい。今日の打ち合わせは、何度目と数えるのもわからないくらいに積み重ねられてきた話し合いのひとつだった。それぞれに意見を出し合い、ライブの細かい点を打ち合わせて行く。それは濃密な時間で、ライブという空間が好きな貴樹にとっては楽しいものだった。

すると、突然。

話し合いの中でメインとなっているはずだった天宮が、急に言葉を止めた。

「……どうしたの、順平ちゃん」

いきなり止まった会話の流れにきょとんとして、貴樹が顔を上げて天宮に問いかける。天宮は意地悪そうに少しだけ唇の端を上げて薄く笑い、意味ありげに隣と目配せを交わす。

「な、何だよ、感じ悪いな！」

ムツとした貴樹が抗議の声を上げるのを聞き流して、天宮は机に頬杖をついた。

「……貴樹さあ、今日、妙にテンション高くない？」

「へ？ え、そう？」

「昨日、撮影の後、挨拶もそこそこにすっ飛んで帰ったって、栗ちゃんに聞いたんだけどさ。それと、関係ありますかね？」

栗ちゃんというのは、貴樹のマネージャーである。栗原和子くりはるかすこというのが彼女の本名だが、ここでは誰もその名で呼ぶことはない。メンバーの中では、栗ちゃんくりちゃんで通用する。いや、今の問題はそんなことではなかった。

余計なことを喋りやがって、と思いつつも貴樹が栗原をにらみつけると、彼女は無関係だとも言いたげに視線をそらした。

この裏切り者、と、貴樹は内心悲鳴を上げつつ、頭の中で目まぐるしく言い訳を考える。天宮が何を考えているのか、何をしようとしているのか、推し量れないほど付き合いが短いわけでもないのだ。そんな貴樹の心の内を知ってか知らずか（おそらくは後者だ）、天宮はやけに楽しそうな満面の笑みを浮かべた。彼がこういう表情をする時に何が起こるのかは、大抵決まっている。ここにいるメンバーのうちの誰かが、彼の吊るし上げを食らうのである。そして、そのターゲットは高確率で貴樹だと決まっていた。

今日の犠牲も、どうやらそこで決定らしい。

「……そつ、そそそそれは、何の関係もな……」

そんな言い訳をするだけ無駄だと思いつつも、貴樹は何とか回避しようとする無駄な抵抗を試みる。

いつになく裏返った声音と妙につつかえた物言いで、何かありますと宣言しているようなものだ。案の定、天宮はにたりと笑みを深めた。

「つつーか、貴樹、お前、俺さまに隠し事をしてもいいと思っ
てんの？」

「……や、思っていないですけど……」

「んじゃ、吐け。キリキリと吐け。今すぐにな。その、妙に高いテンションの理由は何だ？」

「嫌だ。言わない」

貴樹はそう言いきって、言っただまるかばかりに天宮の視線が

ら逃れてそっぽを向いた。

女に手が早くて飽きるのも早い、という評判のこのプロデューサーに、彩の存在を知られてなるものか、と思っただ。

たとえば、彩が貴樹の恋人であったとしても、それを横からかつさらって行くようなえげつない真似は、とりあえず、この男に関してはありえないだろうと思っている。その程度の信頼関係は築いているし、天宮だってそんなことでこのプロジェクトに亀裂を入れるようなことはしないはずだ。だが、それをネタにしてねちっこくしつつこくからかわれるであろうことは必須であり、それだけは避けなかった。

……いや、もはや、この話題が出た時点で遅いとも思わなくはないのだけれど。

天宮の笑みは、既に玩具を見つけた時のそれを大差ない。

「……その笑い方、怖いんですけど」

「そうか？ 俺は笑顔が素敵ですとよく言われるんだがな？」

「あんたの笑顔は胡散臭いですよ！」

「ほう、東城貴樹くん、君はプロデューサーさまに逆らうのかね？」

「逆らうとか、そういうんじゃない、俺はあんたの玩具じゃないつての！」

「順平ちゃん、貴樹の携帯は確保しましたよ。履歴もばっちり残ってます」

別の方向から、別の声がとんでもないことを言っているのが聞こえ、貴樹は驚いてそちらを振り向いた。

「あああああ！！ お、俺の携帯！！」

打ち合わせの最中に携帯が鳴っては困る、と律儀に考えて、ご丁寧に電源まで切って自分から離れた場所に置いたカバンに入れておいたのがまずかった。貴樹が天宮との会話に意識を奪われている間に、それを聞いたメンバーの一人が勝手にカバンから携帯を取り出し、電源を入れた挙げ句、履歴をチェックしようとしている瞬間だった。

「返せよ！」

焦って飛びつくようにして、その手から携帯を奪い取る。

にやにやする相手を睨みつけて、携帯を胸元に抱え込んだ。

持ち主に無断で携帯を手にしていたのは、ツアーのサポート・メンバーであるギタリストの沢口彰さわぐちあきひだ。彼は貴樹に奪い返されたのが心外であつたらしく、やけに不満そうな顔で貴樹を見据えた。

心外なのはこっちの方だ、と、貴樹は心の中で愚痴る。

このメンバーは気心も知れているし、大好きだ。しかし、人をからかうことを何よりも楽しんでる天宮の下では、貴樹のヒエラルキーは一番下だ。世間的に見れば、メイン・ヴォーカルである貴樹がこのプロジェクトを引っ張っているように見えているのかもしれないが、実際は逆である。貴樹は天宮の体のいい玩具と化していることが多いのだ。

そんな天宮の号令があれば、貴樹のプライバシーなどどこ吹く風となる。油断も隙もないとは、正にこのことだった。

大体、貴樹の感覚からすれば、今は真剣な仕事なのだ。だから携帯の電源も切っていたし、そういうふざけたことはしてはならないと思っっている。なのに、天宮にかかれば真剣さなどあつという間にどこかに吹き飛んでしまう。根が真面目でバカ正直な貴樹は、そのたびに天宮の餌食である。

ここの連中に正論を説いてみたって意味がない。そんなことは、今までの経験で嫌と言うほどわかっているはずなのに、つい反論を試みる。

「な、なんで、人の携帯を勝手に見るんだよ！ それに、今は打ち合わせ中じゃないか！」

「関係ないだろ。気になるから見るんだよ。可愛い貴樹くんが色気づいたのかと思うと、俺としては心配で夜も眠れないね。前の彼女にこっぴどく振られたの、忘れたわけじゃないだろ？」

天宮がそう言うと、沢口が同意するように大きくうなずいた。

「そうそう、いきなり出て行っちゃったんだよねえ。同棲までして

たのにさ。貴樹、あの後、かなり落ち込んでたじゃないか」

「あー、そうだったそうだった。REAL MODEの東城貴樹に用はないんだっけ？ ひどいこと言うよねえ」

頼みもしないのに、人の古傷を抉るようなことをほざき、にやにやと笑う天宮。どっちがひどいんだ、あんたが鬼だと思うが、天宮のことを嫌いになれるわけではない。口ではこんなことを言っているが、あの時、貴樹のことを誰よりも心配して憤慨してくれたのは、天宮だからだ。

それでも、時折、殺意が芽生えることに違いはない。彼のことは好きだし、好きと言うよりもむしろ尊敬に近い目で見ていたのだが、こういう時は本気で憎らしい。

この人たちの前で気を抜けば、何をされるかわかったものではない、と、貴樹は思っている。それでも、性懲りもなく毎度ターゲットにされてしまうのは、貴樹がこのメンバーを信頼していて無意識に気を抜いてしまっているからなのだろう。

貴樹は惘然として元の席に戻り、がたと大きな音を立てて椅子に引いた。そこにいた全員の視線が一斉に貴樹に集中したが、それを払いのけるように口を開く。

「時間、あり余っているわけじゃないんですよ。打ち合わせ、続けませんか」

表情を崩さずに、貴樹はそう言う。

だが、その瞬間に返ってきたのは、まるで責任転嫁のような台詞だ。

「いや、俺も、打ち合わせを続けたいのは同意んだけどさ。何しろ、昨日のことが気になっちゃってねえ」

「そ、それは俺のせいじゃないですよね!？」

「うーん、貴樹のせいかなあ？」

そんな天宮の楽しそうな声を無視して座ろうとして腰を落としたかけたところを、いきなり音もなく近づいてきた相手に羽交い絞めにされる。そっちに気を取られた隙に、脇から天宮が手を伸ばして貴

樹の携帯を奪い取った。

「……さて」

「さて、じゃねえだろっ！俺のプライバシーは無視か!？」

「なーに寝言を言ってるの。俺たちは、純粹に貴樹を心配してるんだよ？ さー、沢くん、俺がチエックしている間、そのアホ犬押さえといて」

「アホ犬って言うなあ!」

「どうせ、履歴を消すとか、ロックをかけるとか、そういう真似はしていないんだろ。可愛いね、貴樹は」

「ぎゃあぎゃあ騒ぐ貴樹を横目に、天宮は携帯を楽しそうに開く。

「今ほど、きちんとロックを掛ける習慣を持っていなかったことを悔やんだことはない。貴樹の身体を拘束する沢口の力は強く、振りほどけない。じたばたと暴れても、拘束する腕の力が緩むことはなかった。無駄だとわかってはいても、暴れるのをやめることはできなかったけれど。」

「今後は、ちゃんと暗証番号つきでロックをかけるべきだ。でないと、次にはメールを見られるどころか、周囲に転送されてばら撒かれてしまいそうだ。」

「最新のメールの送信先……へえ、女か？」

「返せつてば!」

「貴樹が最初から素直にこれを渡せば、俺たちだって乱暴なことはいらないんだよ?」

「まるで、今の状況は貴樹が悪いかのような言い草である。天宮のこういう態度は今に始まったことではないが、毎度玩具にされる貴樹にしてみればたまったものではない。」

「そ、それって俺のせいなの?」

「無駄な抗議を、さつきから何度繰り返しているだろう。貴樹はそう思いながらも、なけなしの抵抗を試みる。ここで屈してしまつては、次からは更なる玩具扱いが待っているに決まっているのだ。」

「大体さ、昨日の時点で警戒しないわけ？ 普段は身なりにろくに

気も使わない、たまにお前どこのオタクだよってな格好をしている貴樹が、だよ。昨日に限って、撮影の後にメイクも直さず、衣装さんに揃えてもらった服をそのまま引き取って帰るってのがおかしいことくらい、バカでもわかるだろうっての。その理由を邪推したくないのは、人として当然だろ？ どうせ、女絡みだろ。ああん？」

「順平ちゃんに関係ないだろ！ 昨日は、たまたまそういう気分です。」「たまたま、そういう気分？ やっちゃんにお願いしたんでしょ。」

これから出かけるから、いい印象を与えるメイクをして、って」

安野のヤツ、そんなことまでこいつに喋ったのか！

貴樹は、内緒にしておいてくれと頼んだはずの秘密が、既に全く機能していないことに気づいて、うなだれた。

やっちゃんこと安野^{やすのたいじ}泰司は、貴樹のヘアメイク担当のスタッフだ。彼がいるからこそ、REAL MODEの東城貴樹のメイン・ヴィジュアルが完成しているのだと言っても、過言ではない。彼の存在は欠かせないし、だからこそ、彼の技術には絶対の信頼を置いている。だから、昨日。

撮影の合間の控え室で、貴樹はこっそりと安野に頼んだのだ。少しでも彩に好印象を与えたいと思ったけれど、自分でそういう演出をすることにまるで自信がなかったから、つい手近にいるプロに頼んでしまった。とは言え、安野は身内も同然のスタッフである。遠からず天宮には知られるだろうとは思ってはいたが、昨日の今日とは早すぎる。

それでも、それを甘受して天宮の言いなりになっているほど、貴樹も気弱ではいられない。

「強情になるのは、感心しないなあ、貴樹くん？ そんなふうにかいつぱい否定されちゃうとさ、余計に詮索したくなるのが人間ってもんなんだよねえ」

その理屈は確かに正しいのかもしれないが、甚だ自分本位であると思えない。

と、その時。

「いい加減にしなさいよ、あんたたち！」

それまで黙ったままで事の成り行きを見守っていたマネージャーの栗原が、たまりかねたように叫んだ。

「今は、何の時間かしらねえ、天宮？ 打ち合わせの時間だったよ
うな気がするの、私の勘違いかしら？ すぐに悪ふざけは終わる
かと思っていたけど、いつになったら脱線は修正されるの！ どう
して、あんたたちはそももいい加減かなあ！？」

「そんなこと言ってるけどさ、栗ちゃん。昨日の夜、一番知りたそ
うにしてそわそわしてたの、自分だつてわかってる？ 明日、貴樹
吊るし上げようぜーって息巻いてたのも栗ちゃんだし。何と言つて
も、栗ちゃんがREAL MODEの東城貴樹のイメージを作り上
げたんだし」

「確かにね、私が気にしているのは事実よ。でも、東城くんの恋愛
沙汰よりも、今はツアーの最終打ち合わせの方が大事でしょ？ R
EAL MODE初挑戦の全県ツアー、しかも、半年で六十本近い
ライブをこなさなきゃならない。くだらない騒ぎを起こして打ち合
わせの進行を邪魔するなら、たとえ天宮でも許さないからね」

「うわあ、栗ちゃんこわーい。まあ、そう言われたら仕方ないね。

真面目にお仕事に戻りましょー！」

「それから、東城くん」

「……はい」

「別に、うちは恋愛を禁止してないわ。でも、今の自分の立場を考
えて行動するのを忘れないでね。体調管理も、イメージを保つこと
も、あなたの大事な仕事よ」

「わかってます」

「はい、じゃあ、続けるわよ！」

至極尤もなマネージャーのとりなしには納得したのか、天宮も真
面目な表情に戻って椅子に座り、それぞれに意見を出し合っ
て話し合いが再開される。一瞬前までふざけたことをしていても、こうし

て即座に切り替えができるところが天宮のすごいところであり、このメンバーの尊敬できる部分だ。

そんな気心の知れたメンバーの熱の籠もった議論を眺めながら、貴樹は間近に迫りつつある次のツアーに思いを巡らせる。

(ツアーか……)

REAL MODEは、もうすぐデビュー五周年を迎えようとしている。

これまでも全国ツアーを回ったことはあるが、今回ほど大掛かりなツアーは初めての試みだった。各地のアリーナクラスでの二日間公演を含む、全五十八本の大規模な全県ツアー。今現在の売り上げと集客数があるからこそ、チャレンジできるものだ。今まで以上に緊張するし、打ち合わせも真剣に取り組まざるを得ないことはわかっている。

でも。

どうしても、気になる。引つ掛かってしまう。

それは、もちろん彩のことだった。

結局、貴樹は自分がどんな仕事をしているのかということをお話することができなかった。せつかく得ることのできた、REAL MODEの東城貴樹というイメージを知らない友だち。初めて、自分から誘って親しくなってみたいと思った女性。

言えるはずが、なかった。いや、言おうとは思ったけれど、言えないまま終わってしまった。

彩から仕事を聞かれて、「フリーでいろいろ」などと曖昧に答えたくらいで、それでは全く答えにはなっていない。フリーで働いているという意味では間違いではないかもしれないが、限りなく嘘に近い答えであることは自覚している。

たぶん、自分は、彩に惹かれ始めている。きっと、そうだと思っている。

そうでなければ、食事になんて誘ったりしない。それは、充分すぎるほどに理解しているし、だからこそ、知られたくないとも思っ

ただ。彩にだけは、そんなフィルターを通して自分を見て欲しく
なかった。素の自分を、知って欲しかった。

「……ダメだ、ありゃ。頭がお花畑じゃね？」

天宮の呆れた声が、溜め息に重なる。

明後日の方向を見て溜め息をつく貴樹を見て、天宮は肩をすくめ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9438y/>

Over Line ~ 君と出会うために

2011年12月2日00時49分発行